

マタイによる福音書 25:1-13

「花婿を待つ幸い」

2025年12月7日(主の日)

藤沢北教会 長倉基牧師

わたしたちは「待つ」ということが大変苦手だと思います。特にメールやSNSを使うようになると、すぐに返事がくることを期待し、自分もすぐに返事をしなくてはいけないという思いにかられます。連絡がすぐにこないと大変心乱されます。嫌われたと思うか、あるいはもうどうでもいい、と思うか、自分が何か悪いことを言ったのか、と心が折れてしまします。子供の成長にしても、また大人でも何かを理解したり、職場で仕事を覚えたり、何か考え方を身につけたりしてほしい時に待つことができない。時間だけでなくすぐに白黒つけたがる、というのも待つことのできない現れといえるかもしれません。けれども、教会の信仰において、「待つ」ということはとても大切な、わたしたちの基本的な姿勢です。

アドベントに入りました、先週第一週はミカ書とマタイによる福音書から、救い主が来てくださる、それがどれほど確かな希望なのか、ということを聞きました。アドベントという言葉はそもそも「到来つまり来る、来た」という意味でした。御子イエスが「来てくださった」クリスマスという出来事と「将来来る」と約束してくださっている終わりの日の再臨の確かさを思うのがアドベントです。キリストの到来の恵みということに強調をおいて語ったつもりです。けれども、それだけで終わりなのではなくて、神の到来に対して、わたしたち人間の側の応答というものがあるわけです。それは「待つ」ということになると思います。行事としての今年のクリスマスの日を待つばかりではなくて、キリストが来てくださることを待つ。主がまた来てくださると約束してくださるのだから、それを持つ、楽しみに、希望をいだいて待つのがわたしたちの応答です。けれども、それは時に簡単なことではない、とも思われることです。だからこそ、主イエスはわたしたちが待ち続けることができるよう、励ましの言葉を語ってくださるのです。

今わたしたちは礼拝でマルコによる福音書を順番に聞いてきてまして、主イエスがエルサレムでお過ごしになる最後の一週間のところまできました。いわばクライマックスに近づいてきました。今日、アドベントの箇所として与えられましたのはマタイによる福音書ですけれど、この箇所も同じ主イエスの最後の一週間の話です。マタイによる福音書はこの最後の一週間をマルコよりもたくさん記しています。何が多いかというと、ファリサイ派などの指導者たちとの議論、そして何よりも弟子たちへの教え、またたとえ話です。そしてたとえ話は、大きく二つのテーマのものが語られています。人間のところにきてくださった主イエス、ご自分のことですが、を救い主として受け入れるか。そして、終わりの日に来ることを信じて待つことができるか、と主イエスは問われるのであります。クリスマス、主イエスが来てくださったことを喜んで感謝するこの時、同時に、主イエスがまた来てくださるという希望をあたらしく捺せられる思いがします。そこで、わたしたちはキリストが

来てくださる、という希望の中、どのように生きたら良いのか、主イエスはそのことを語ってくださいます。待つ喜びを語ってくださるのです。

さきほどクライマックスといいました。それは主イエスの十字架です。マタイによる福音書のエルサレムでの最後の一週間は議論と教えは、わたしたちの聖書では第21章からこの第25章の終わりまで続くものですから、前から読んでいくとつい忘れてしまうかもしれませんけれど、十字架を目前してのことです。主イエスは、ご自分が死ななければならぬことをすでにご存知であり、覚悟もなさっていたと思います。そこで弟子たちに、「わたしは死に、復活もするが、なおあなたたちの前から去らなければならない。しかし、必ずまた来る。だから待っていなさい。目を覚ましてまっていなさい」と語られた、その思いは大変深いものであったと思います。

復活の後、聖霊が降り、キリストの教会の歩みが始まりました。それは再び来てくださるキリストを待つ歩みでした。それから2000年経ちました。私たちの教会は今なおいつか必ず来られる主イエス・キリストを待ちながら、歩みをつづけています。最後の日に主イエス・キリストが来られる。主を待つとはどういうことか、そのことをわたしたちにわかるように主イエスは語ってくださったのです。その一つがこの10人のおとめのたとえです。召使いであるおとめたちが結婚式にむけて、ともし火を掲げて花婿を迎えるという、務めを仰せつかったというのです。この10人の乙女というのは言うまでもなく私たちキリスト教会のことです。「教会はキリストの花嫁」キリストを花婿としてむかえる教会は花嫁である。これは新約聖書の他の箇所にも記される、わたしたちキリスト教会が受け継いできた終わりの日のイメージです。わたしたちは、この10人のおとめたちのようにいつか必ず来られる花婿キリストを待ち続けているというのです。

ところが、この花婿の到着が思いのほか遅れました。当時の結婚式というのは、それなりに名のある人の場合は、村中を上げて行われたようで、花婿が村へやってくる形をとっていたそうです。そして何日にもわたって村中の人を集めて宴会をするのです。ところが、現代のように電話もインターネットもありませんから、花婿がいつ来るかはっきりわからないのです。もちろん大体の日付は約束していたでしょう。けれども場所によっては何日もかけて歩いてくるわけで、何かあればすぐに予定もずれてしまいます。けれども連絡の手段がない。待つ方もある程度そういうことは予想をしながら待っていたはずです。そうすると、どうやら花婿が遅れているらしい、夜になり、おとめたちが眠り込んでしまったというのは無理もないことだと思います。そうして真夜中に「花婿が到着した！迎えに出てきなさい！」と見張りの大きな声が聞こえた時、この10人のおとめたちの間に決定的なことが起こります。10人はみんなともしびを持っていましたが、そのうち5人は油切れにならないように予備の油を持っており、残りの5人は油を用意していなかったというのです。そのために大変悲惨な結末を迎えます。

新約聖書には多くのたとえが収められています。主イエスはたとえ、たとえ話を多く語られました。たとえ話の名人と言っていいと思います。生活に根ざした、イメージ豊かな

たとえばかりです。そして、なによりも本質をつくたとえです。けれどもそれはわたしたちにとってわかりやすいことを意味するわけではありません。するどさを持ちながら、なお、疑問もわく一筋縄ではいかないものばかりです。今日のたとえも、みなさん、話のすじはわかるけれども、いろんな疑問をお持ちになったのではないかと思います。例えば、かしこい／おろかとはどういうことだろう。この油って一体何だろう。用意をするといつても自分はなにを用意すればいいんだろうと。あるいは、かしこいおとめたちはどうして油のない5人に、わけてあげないで買ってきなさいなどとその場を追い出すようなことをしたのだろう。惜しまず分けてあげるのが愛なのではないだろうか。と。けれども、このたとえは、ひとつひとつを何かに置き換えて細かく考えるようなたとえではないと思います。おろかな5人は、ともし火を持っていた。夜になるかもしれないことがわかつっていたからです。けれども、油は用意していませんでした。そこまでやるつもりがなかったのか、自分の都合しか考えなかったとも言えるかもしれません。結局この愚かな5人というのは本心では花婿のことなど待っていなかったのです。その深いところにある思いがあらわれたのが予備の油だとするならば、他の人がわけてあげるわけにはいかいのではないでしょうか。ここで主イエスは、自分でしかともすことのできない、自分ひとりの責任においてしかともすことのできない辺りをともし、ともし続けることができるよう備えておく姿を求めておられるのです。「かしこい」、「おろか」というのはたとえにすぎません。主がふたたびきてくださる、そのことを心から信じ、それにふさわしい備えをする、待つのにふさわしい生活・生き方を主は求めておられるのです。

主イエスはこのたとえを、本当に心から弟子たちにわかつてもらいたい、と思ってお語り担ったに違いない、とわたしは思います。「いいか、わたしはもうすぐあなたたちとは一緒にいられなくなる。けれども必ず戻って来るから、待っていなさい」。弟子たちは指導者達の殺意を知っていました。エルサレムで議論もしているのですから緊張の高まりも感じていたでしょう。けれども、なお、よく理解できなかったと思います。なぜ主イエスがこんなたとえをなさるのか。待つ必要などあるのだろうか、まさに今、ここで先生はたちあがって、指導者たちの罪をあばき、ローマの支配から解放してくださるのではないか。もしそう思っているのだとするならば、それは備えのない姿勢です。自分の都合で主が来てくれると思っている「おろかな」弟子たちにすぎません。

わたしたちにもまた、救いを自分たちの思いのままにしようとする誘惑があると思います。自分の願いをかなえてほしい、自分が困っていることを助けてほしい。もちろん主は助けてくださいます。けれども、「それ以上のことは、ちょっとわたしには大変なので」とは行きません。わたしたちは、主に従うということがどういうことかをすでに知らされているからです。弱っている人を助け、仲間ハズレの人の友となってくださる救い主イエス・キリストは、同時に、「わたしに従いなさい」とわたしたちを弟子として選び、主の道を歩むようにとおっしゃるのです。人を愛しなさい。敵すらも愛しなさい、人を赦しなさい。神を愛しなさい、み心を求めて祈り、主なる神だけを礼拝しなさい。

そこでなお、わたしたちは途方にくれてしまいます。主の目に適うような備える歩みができているのだろうか。もしその時に、「あなたの備えは十分ではなかった」と言わされたら外に追い出されてしまうのだろうか。どうせ自分はその程度の信仰しかないのだ、と。そこでみな、「わたしなんかだめなんだ」とあきらめるか、「わたしなどまだまだですね」とわかったふりをしたくなるものです。

主イエスはこのたとえをこう語り始められました。「天の国は次のようにたとえられる」。このたとえは天の国のたとえなのです。花婿が来てくださる。たしかに自分の想定外かもしれないけれど、必ず来てくださる。それを心待ちにするおとめの姿です。ここでは、かしこいおとめも含めて10人全員が寝てしまいます。主イエスはわたしたちが待ちくたびれて寝てしまうような者だということをよくわかってくださるので。それでもなお、途中で寝てしまうかもしれないけれど、起きたらすぐに迎えに出れるように備えておく、それほどたのしみにしているのです。ですから、主イエスはわたしたちをおどすために5人のおとめのことを語られたのではないと思います。ある神学者はこのたとえについて、わたしたちがおろかなおとめではなくかしこいおとめだけを見るように、主ご自身がわたしたちをかしこいおとめのように生きさせるために語られたことをこういいました。「主イエスがさばきについて語られる時、その物語はすべて憐れみの物語であることをわすれてはならない」。厳しいと思える裁きの言葉もまた、絶望して心折れるような思いの中希望を失って待つことをやめてしまいそうなわたしたちをもういちど立ち上がらせ、わたしたちが心から主の再臨を待ち望む者になるようにと主イエスはこのたとえを語ってくださいました。今は見えない主イエスが来てくださる、このことを、主イエスご自身が、憐れみのすべてを注ぎだすようにして語られているに違いないのです。主を本当には望んでおらず、備えを怠ったこの姿は、わたしたちから最も遠い姿として主イエスは描き出されたに違いありません。これが天の国たとえだからです。

主イエスはこのあと十字架におかかりになります。弟子たちはなぜ主イエスがここでこの話をなさるのかわからなかったかもしれない、と言いました。けれども、この主イエスの十字架を目撃し、さらにそのあと復活の主に出会った時、そして「わたしはまた来る」との言葉とともに天に昇られた時、弟子たちは初めてこのたとえの意味を悟ったに違いありません。マタイによる福音書の最後に記された主イエスの言葉、これは復活の主の言葉であり、また昇天に際しての言葉だといってもいいと思うのですが、このような言葉です。「あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」

備えて待つとは、この主の約束を信じ、この宣教命令に従って歩むことにはかなりません。そのために、聖霊によって主はわたしたちと共にいてくださいます。その主が、救いを完成させ、わたしたちを永遠の平安に入れてくださる。そのことを希望として、主にお会いすることを待ち望み、備えることもまた、聖霊におゆだねして、歩みを続けいきます。